

賀茂別雷神社の御戸代会神事(七月一日)
とヒオウギ草

市忠顕

が示されている。日本では「射干」を「シヤガ」と読み、アヤメ科アヤメ属の *Iris japonica* (シヤガ) に当ててるが、誤用。

この神事は、奈良時代、孝謙天皇の御代に上賀茂神社(賀茂別雷神社)が神領地としての御戸代田(みとしろだ)を朝廷より寄進されたことに始まる。田植えの終了後、イナゴ等の虫害の発生を未然に防ぐための祈願をおこなう神事である。五月に供えた葵・カツラに替えて、ヒオウギ草が神前にお供えされる。

ヒオウギ (射干) *Iris domestica* はアヤメ科アヤメ属の多年生草本。英名 **Leopard flower** 日本(本州、四国、九州、沖縄)と台湾等に自生。夏にオレンジ色の地に赤色の斑点のある花を放射状に開き、秋に黒色の種子を含む実を結ぶ。別名…からすおうぎ(烏扇)、ひおうぎあやめ。古名…ぬばたま、うばたま。漢字表記の別名…夜干(やかん)、烏扇、烏蒲(からすがま)など。ヒオウギの黄色の根茎を乾燥したものは射干(やかん)という生薬で、扁桃腺炎、去痰などに用いる。中国の『神農本草経』にも、薬効



▶ダルマヒオウギの生花

京都の祇園祭や大阪の天神祭では、商家の床の間(生花)や入口付近の軒下に(鉢植えなどで)飾られる。生花の場合
はコンパクトなダルマヒオウギ(園芸種)の事が多い。古代にヒオウギで悪霊を退散したという逸話があり、このことから厄除けの花としてヒオウギ草が飾られるようになったと考えられる。檜扇は宮中の公卿が厄を祓ったり、災難が降りかからないように持っていたとも言われている。祇園祭は元々、疫病をはやらせている**怨霊の怒りを鎮める**ために始められた祭(御霊会)で、悪霊退散に使われたという「ヒオウギ」は祇園祭に欠かせない植物となった。御戸代会神事でも厄払いの意味が含まれていると考えら

れる。

和名のヒオウギは、その剣状の葉が平面的に広がり、檜扇を開いた形状に似るので、この名があるとされる。花の色が緋色なので、緋扇という説もある。秋に採れるヒオウギの黒くて光沢のある丸い種子は「ぬばたま（射干玉）」と呼ばれた。「ぬばたま」は黒い玉の意味で、種子の色と形状から来ている。黒玉、烏玉、烏羽玉、野干玉、夜干玉なども書く。和菓子の烏羽玉（うばたま）はヒオウギの黒い種子を模したものの。

『枕草子』の 286 段に【檜扇は無紋。唐絵。】とある。（段数は岩波の日本古典文学大系による。）**檜扇**は平安貴族の持ち物で、檜の薄板を重ねて作り、要を金属で留め、上部を糸で綴じた木製の扇。桧板の枚数（橋数）は性別や身分によって異なるとされる。男子の公卿は二九橋、殿上人は二三橋など。無地（白木）のものとは絵（唐絵または大和絵）入りのものがあるが、これも用途による。儀式の式次第が書かれた桧扇が出土しているの
で、白木のは備忘録としても用いられたと考えられている。衣冠単（男子の正装）姿の時は笏を持ち、桧扇を懐中した。女子の正装（十二単や桂袴）では三

九橋が本義で、絵柄のあるものが好まれたのではないか。上賀茂神社の**競馬会神事**（五月五日、端午の節供）では後見などの所役が白木（無紋）の檜扇を持つ。

『万葉集』において「ぬばたま」は、黒や夜などに掛かる枕詞「ぬばたまの」として使われており、植物の「ぬばたま」（ヒオウギ草）を詠った歌は見られない。

【あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠（かく）らくおしも】
（柿本人麻呂）169

【佐保河の小石ふみ渡りぬばたまの黒馬（くろま）の来る夜は年にもあらぬか】
（大伴坂上郎女）525

【ぬばたまの昨夜（きざ）は還しつ今夜さへわれを還すな路の長道（ながて）を】（大伴家持、紀女郎に贈る歌）781

参考文献

日本古典文学大系 19『枕草子 紫式部日記』岩波書店（初版 1958 年）
木島温夫著「ヒオウギと祇園祭」、『京都園芸』第 101 集 52 頁（平成 25 年）
八束清貫著『神社有職故実』神社本庁（昭和 26 年初版）
加納喜光著『植物の漢字語源辞典』東京堂出版（2008 年）